



ActionCS アクション・シーエス Ver1.02.0  
取扱説明書

## ActionCS 概要

筆者作成の Alarm Acc(アラーム・エーシーシー)および DocLaunCS(ドック・ラン)に登録されている、ドキュメント(フォルダ・実行ファイルを含む)を開く、または起動する操作を LAN で接続されている隣接コンピュータから行うための送信設備(リモコン)です。送信設備としてはやはり筆者作成の TimerA(タイマー・エー)がありますが、ActionCSはその時限装置部分はずし受信設備(Alarm Acc/DocLaunCS)へ手動で信号を送るツールです。受信設備にパソコンのシャットダウンツールを登録しておけば、ファイルサーバなど通常人が操作しないパソコンを遠隔操作で電源オフすることに使えます。また簡単なメッセージの送付もできますので1階・2階での連絡などにも使えます。定型的な指令はファイルとして保存でき、起動書式で自動開始、終了が可能です。自分のパソコンのDocLaunCSから簡単に起動できるようにしておくと隣のパソコンで結構遊べたりします。

## インストール方法

インストーラは用意していません。

任意のドライブに新規にフォルダを作成(例えば C:\¥ActionCS とか C:\¥Program Files¥ActionCS など)して、解凍されたファイル全てコピーします。後は、ActionCS.exe ファイルをエクスプローラ上でダブルクリックすれば動き出します。必要に応じて、ActionCS.exe のショートカットを作り、デスクトップなどに置いておけば使いやすくなります。

定型的な指令があれば、「名前をつけて保存」で ActionCS定義ファイル(拡張子=actn)が作成できます。使用する場合は拡張子 actn に対して ActionCS.exe をウィンドウズ標準の関連付けしておくとも便利です。

ウィンドウズでの関連付けはウィンドウズのレジストリを追加しますので、これを回避したい場合は筆者作成の DocLaunCS 内での関連付けを行えば、DocLaunCS から ActionCS定義ファイルが簡単に使えるようになります。

## バージョンアップ方法

基本的にバージョンアップは ActionCSを終了させ、配布された書庫ファイルを解凍して得られたファイルをインストールフォルダに上書きコピーするだけです。ユーザ固有の環境設定ファイルやドキュメント保存用のファイルなどはそのまま引き継がれます。

ActionCS のメニューバーの [ファイル] - [インストール先フォルダを開き終了]は、インストールフォルダを開くと同時に ActionCS も終了するのでバージョンアップ時には便利です。

## アンインストール方法

アンインストーラはありません。

ActionCS.exe が収まっているフォルダごと削除してください。インストール時や動作時にレジストリは使っていないのでアンインストールはこれで完了です。

手動で、拡張子 dsta をウィンドウズ標準の関連付け操作を行っている場合は、レジストリに残ります。

この削除はエクスプローラを起動して、「ツール」-「フォルダオプション」の「ファイルタイプ」タブで actn を探し出し削除してください。・・・他のものを消さないよう注意して行ってください。

## 動作環境

- ・Windows2000、WindowsXP の日本語 Windows で「.NET Framework 2.0」以上がインストールされている32bitパソコン。
- ・WindowsVista、Windows7 の日本語 Windowsが動作している32bitパソコン。

ご自分のパソコンに「.NET Framework 2.0」以上が動作しているかどうかは「コントロールパネル」-「プログラムの追加と削除」から判断することができます。筆者の場合ですと

Microsoft .NET Framework 2.0

の一行が見出せます。2.0 以上であれば OK です。

最近マイクロソフトの Windows Update ページから後続バージョンが比較的簡単にインストールが可能になっています。

Windows Vista 以降のパソコンには Framework 2.0 の後続バージョンがすでにインストールされています。

なお、「.NET Framework Version2.0 インストールガイド」を筆者のサポートページ「屋根裏実験室」に公開しています。よろしければ参考にしてください。

>> 屋根裏実験室 オリジナル作品

<http://homepage1.nifty.com/yaneurazikken/gallery.html>

ActionCS はLANで接続されたパソコン間の通信ツールですので、前提となるLANの接続が正常に動作していることが必要です。パソコン間でフォルダ共有またはプリンター共有などが正常に動作しているLAN環境でしたら問題ないと思われます。

## 起動

起動はインストールしたフォルダにある実行ファイル「ActionCS.exe」をエクスプローラでダブルクリックします。もちろんショートカットを作成してデスクトップ、タスクバーにあるクイック起動ツールバーなどにおいておけば利便性がまします。もしプログラムランチャーを使用しているのであればそこに登録しておくのも便利につかう方法です。

継続的に使うようでしたら、ActionCS の定義ファイル(拡張子=actn)に対してウィン

ドウズ標準の関連付けをしておくとも起動しやすくなります。

## メイン画面



ActionCS の信号を受け取る受信設備のツールは2種類あります。AlarmAcc と DocLaunCS です。ActionCS を使用するにはいずれかの受信設備が必要になります。

受信設備は筆者の Web ページ 屋根裏実験室 ( <http://homepage1.nifty.com/yaneurazikken/> ) からダウンロードが可能です。

### [ 送信先機器名 ]

受信設備のツールが動作しているパソコンの「コンピュータ名」です。コンピュータ名は AlarmAcc の場合、起動した初期画面で表示されます。また、DocLaunCS の場合は起動したあとメニューの「環境」-「環境設定」-「受信設備」の画面で確認できます。詳細はそれぞれの取扱説明書にて確認してください。

### [ ポート番号 ]

ActionCS からの信号を実際に受け取るツールを識別する番号です。DocLaunCS の場合デフォルト値として「9913」になっています。DocLaunCS を1台のパソコンで2つ動作させている場合はこのポート番号を異なる値にします。そうすることにより ActionCS からの信号の行き先を個別に決定することができるようにしています。なお、同一ポート番号をもつ受信設備を同一パソコン内で複数起動すると起動がキャンセルされるか、通信処理に障害が発生します。

ポート番号の決定は他の通信機器、通信ソフトが使用していない番号を選ぶことが重要です。デフォルトの「9913」はそういう数値と思われるものですが、万一重複しているようでしたら変更してください。

### [ ドキュメント番号 ]

受信設備に登録されているドキュメント(データファイル・フォルダ・実行可能ファイ

ルなど)のシリアル番号のことです。この番号で、開きたい、もしくは実行させたいソフトを指定します。

#### [ ツール番号 ]

DocLaunCS の場合 0 ~ 4 の番号を指定します。0 はウィンドウズ標準で関連付けされているツールを使用するという意味です。1 ~ 4 は DocLaunCS 独自で関連付けされているツール番号です。AlarmAcc の場合は独自の関連付けはありませんので 0 の指定しか意味を持ちません。

#### [ メッセージ ]

受信設備側で表示されるメッセージです。

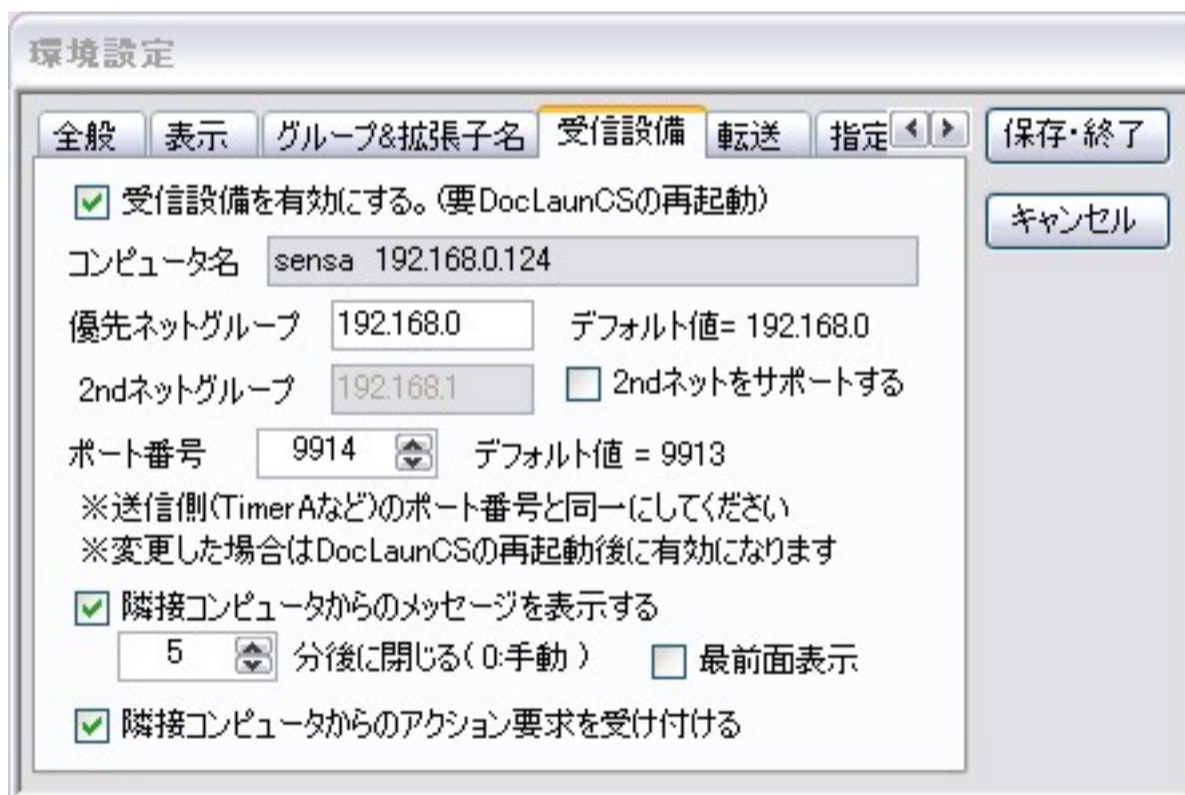
#### [ 覚書 ]

定義ファイルとして保存したとき、その内容説明をメモ書きする領域です。定義ファイルには保存されますが、ここに書かれた記述は動作にかかわりません。

ドキュメントの指定などが番号でかつ受信設備側で管理されているもので、ActionCS のパソコンからはその内容を調べられません(この部分は将来改善の余地があります)。そのためのとりあえずの打開策です。

### 受信設備の設定

### DocLaunCS での環境設定



DocLaunCS環境設定例

DocLaunCS のメニュー「環境」-「環境設定」-「受信設備」により上記画面が開きます。設定内容は筆者が使用しているものです。ここでの例では、**コンピュータ名が「sensa」、ポート番号「9914」となっています。**

この画面からはコンピュータ名は表示するだけで、設定や変更は行えません。コンピュータ名の設定変更はWindowsXP(sp2)の場合はデスクトップのマイコンピュータの右クリックから「プロパティ」-「コンピュータ名」-「変更」で行うことができます。

また、ここでの例では、隣接コンピュータからのメッセージとアクションの受け取りを許可しています。ここで許可のチェックをはずしていると ActionCS からの信号は無視されます。

**要するに、ActionCSからの信号を受け取るか受け取らないかの最終決定権は受信側にあります。**

忙しくて、隣の人からのチョッカイにかまっていられないときは「受信設備を有効にする」のチェックをはずすか、必要に応じて下の「メッセージを表示する」または「アクションを実行する」のチェックをはずします。

## A larm A cc での環境設定

A larm A cc は常駐プログラムです。常駐されるとデスクトップの右下にある通知領域(タスクトレイ)に A larm A cc のアイコンが追加されます。そのアイコンを右クリックするとメニューが表示されます。

メニュー「設定」で環境設定のダイアログ画面が開きます。この中に DocLaunCS 同様にポート番号が指定できる欄が用意されています。

起動されるドキュメントファイルは A larm A cc ではアクションファイル、もしくは動作ファイルという言い方をしている、環境設定画面から登録できます。登録できるドキュメントは 50 個です。ドキュメント番号としては 0 ~ 49 の範囲になります。

詳細は A larm A cc 取扱説明書を参照してください。

### [注意]

**重複説明ですが、1台のパソコン内で同一のポート番号を指定した受信設備のツール(ソフト)は動作させることはできません。DocLaunCS と A larm A cc を動作させるときはそれぞれのポート番号は異なる数値にしてください。**

### メニュー説明

#### ファイル

>> 定義ファイルを開く

ActionCS 定義ファイル(拡張子=actn)を読み込みます。

>> 定義ファイルの上書き保存

現状の設定を ActionCS 定義ファイル(拡張子=actn)へ上書き保存します。ファイル名が定まっていないときは別名保存と同様にファイル名と保存先指定の画面が表示されます。

>> 定義ファイルの別名保存

現状の設定を ActionCS 定義ファイル(拡張子=actn)を保存します。このときファイル名と保存先指定の画面が表示されます。

>> インストール先フォルダを開く

ActionCS.exeのあるフォルダを開きます。

>> インストール先フォルダを開き終了

ActionCS.exeのあるフォルダを開いた後、プログラムを終了させます。ActionCSのバージョンアップの上書きコピーする場合に便利です。

>> 終了

プログラムを終了します。

## 環境

>>環境設定

[全般]

ActionCS定義ファイル保存のための専用フォルダを指定します。

メニュー「ファイル」-「定義ファイルを開く」のときなどで優先候補のフォルダになります。

[外部ツール]

内部で起動するファイル管理ツールを設定できます。

設定されていないときはウィンドウズ標準(多くはエクスプローラになると思います)のファイル管理ツールを使用します。

## ヘルプ

>> バージョン情報

バージョン情報の表示

>> サポートWebページ

サポートWebページ「屋根裏実験室」を表示します。インターネットへの接続を行います。

## 起動書式

### 注意

- ・起動書式でパス名を指定する場合は「"」ダブルコーテーションでくるようにしてください。
- ・書式の記述には不要なスペースは入れないでください。
- ・半角スペースはスイッチ識別子の区切り文字として使用しています。

>> /actn=<ActionCS定義ファイルパス名>

ActionCS定義ファイル(拡張子=actn)の指定スイッチ。スイッチ識別子の /actn=は省略可能です。

>> /g

自動開始スイッチ。起動されるとオペレータの送信ボタンを待たずに即、送信が開始されます。メッセージなどの設定内容を確認したり再設定するタイミングはありません。

>> /e または /e=<遅延時間>

自動終了スイッチ。送信が完了すると、ActionCS.exe も終了します。遅延時間を指定するとその時間だけ終了を遅らせます。遅延時間の単位は 1/10 秒です。指定有効範囲は 10(1秒)以上です。指定をしていないときのデフォルト値は 10(1秒)になっています。

>> /m

最小画面指定スイッチ。最小化画面でActionCS.exe を起動する。自動開始スイッチ (/g)が指定されているときモニター画面の煩雑を避けます。